

# フランス語圏における「パトワ」概念の広がりとは断絶 ——ルシヨン地方（北カタルーニャ）におけるpatois概念の受容拒否——

佐野 直子

## 0. はじめに

フランス語圏における「パトワ (patois)」概念は、中世後期の出現以来「言語 (langue)」「方言 (dialecte)」「固有語 (idiome)」などと対比されつつ、その意味を変容させていった (佐野 2020, 佐野 2021)。しかしもう一点「パトワ」概念の興味深い点は、その普及と受容の著しい地域差にある。

下層民の言語行動への軽蔑的含意を持つ「他称」として現れたこの概念は、革命期前後には徐々に「領域化」し、話者たち自身が自らの言語行動に対して称するようになっていった。それは 1806 年から 1812 年にかけての Coquebert de Montbret のロマンス諸語地域に対する「方言」調査の返答からもうかがえる。すなわち、調査者側は「パトワ」という単語を忌避して「方言」を使用しているにもかかわらず、多くの返答においては「パトワ」という単語が使用されたのである (佐野 2021, p. 33)。<sup>1</sup>

しかしその中で唯一、「言語」を使用して返答したのが、「カタルーニャ語 (langue catalane)」の回答であった (Coquebert de Montbret 1831, p. 507)。ルシヨン地方がフランス王国に併合されたのは 17 世紀半ばと比較的遅かったことが大きい。近代国民国家体制において、フランス語の普及とともに地域諸言語が激しい抑圧を受けたことは他地域と同様であるにもかかわらず、ロマンス諸語の一つでありながら、カタルーニャ語話者たちは「パトワ」概念を受け入れなかった。ルシヨン地方における「パトワ」概念への拒否意識は現在も極めて強い。<sup>2</sup>

フランス国内のルシヨン地方におけるカタルーニャ語意識については、Rafanell の一連の研究 (Rafanell 1991, 2006, 2017) や、19 世紀の言語状況についてまとめた Berjoan (2009) などの先行研究があるが、「パトワ」概念の拒否は議論の前提となっており、研究者自身がこの概念への強い忌避感を共有している<sup>3</sup>ため、「パトワ」概念への拒否感それ自体について、十分に考察がなされているとはいえない。

そこで本稿では、特に 19 世紀-20 世紀初頭のフランス語圏で刊行された書籍や雑誌、スペインで編纂されたカタルーニャ語辞典の項目などを元に、フランスのカタルーニャ語地域において、「パトワ」という単語はどのように使用された／されなかったのか、当地において「パトワ」概念が何を指示されるものとして受け止められ、それゆえに拒否されるに至ったのかを考察していく。

## 1. 19世紀前半のフランス語圏における「Roussillon地方のことば」についての議論

### 1.1. Eugène Coquebert de Montbret, *Mélanges sur les langues, dialectes et patois* (1831)

*Mélanges sur les langues, dialectes et patois* (1831) は、1806 年から 1812 年にかけての父 Charles Etienne

Coquebert de Monbret のロマンス諸語地域に対する「方言」調査で収集されたデータと考察、そして当時フランス国内の言語状況について刊行されていた書物をまとめた書籍である。ここでは、1830年時点のフランス王国内の言語分類と話者人口推計は、以下のような分類となっていた。<sup>4</sup>

Il peut y avoir dans les limites actuelles du royaume,		
De Langue flamande	・ ・	177,950
Langue allemande	・ ・	1,140,000
Langue bretonne	・ ・	1,050,000
Langue basque	・ ・ ・	118,000
Langue italienne	・ ・ ・	185,079
		} 2,671, 029
Enfin de langue française dans ses différens <u>dialectes et patois</u>		・ ・ ・ 29,180,516

(Coquebert de Montbret 1831, p. 16)

フランス語圏に根ざしていた「言語 (LA langue)」 (=フランス語) /パトワの二分法から、18世紀以降に *dialecte* と *idiome* 概念がフランスの多様な言語事象にも適用されるようになるにしたがって、言語事象をどの概念のもとに記述するのか、諸概念のせめぎ合いが起きていた (佐野 2021)。この本においては、「低地ブルトン語やバスク語はフランス語の方言ではなく、真の言語である (*ibid.*, p.III)」とみなされた一方で、「ラテン語から派生した諸言語の個々の固有の性質が何かを明確にすることは難しい (*ibid.*, p. 12)」ゆえに、フランスの領土内で話されるロマンス諸語は「フランス語 (*langue française*)」の下位区分としてまとめられ、「パトワ」概念は「(フランス語の) 方言」概念と並列されている。ただし、コルシカで話されていることばは、隣国の威信ある書記言語であるイタリア語という「言語」に包含されて数え上げられていた。

その中で複雑な様相を呈したのが、「カタルーニャ語」の扱い方であった。一方で、フランス王国では「スペインの諸言語のうちの一つ (カタルーニャ語) が話されている (*ibid.*, p. 8)」と、明確に名称をあげて「言語 (*langue*)」とみなしつつも、他方では別個の「言語」と数えずに、フランス語の「方言とパトワ」の中に含んでいる。その理由は、以下のように説明されている。

Quant au dialecte catalan, lequel s'étend le long de la Méditerranée, (...) il diffère à tel point du castillan, et se rapproche tellement au contraire, par ses caractères principaux, des dialectes du midi de la France, qu'il serait peut-être plus exact de le rapporter au français qu'à l'espagnol, Les Catalans et les Valenciens regardent eux-mêmes cette affinité de leur langage comme tellement avérée, qu'ils ne le nomment jamais autrement que langue *lémosine*. (...) Il faut donc comprendre dans le domaine de la langue française les pays où se parle le catalan, ou bien il faudrait en retrancher tout ce qu'il y a en France de provinces de langue *romane*, ce qui restreindrait le français proprement dit à la partie septentrionale du royaume. (*ibid.*, pp. 9-10)

19世紀初頭当時において、「カタルーニャ方言」と「南仏の諸方言」の区別は、その言語の名称 (*langue lémosine*) に鑑みてもそれほど明確ではなかった。<sup>5</sup>そして、「南仏の諸方言」との類縁性を根拠に、「カタルーニャ方言」は、「フランス語の領分に含める」、すなわちフランス語の「方言とパトワ」と扱うことができるとみなされている。ただし、当の「南仏の諸方言」がフランス語の「方言とパトワ」として扱われる根拠とは、そうしなければ「フランス語の領域が王国の北部のみに限られてしまう」から、

と、あくまでも言語外的な都合に基づいている。「方言」「パトワ」概念は、南仏の言語事象を（正統な、固有の）「言語」と認めないために動員されている。そしてその根拠として、南仏の言語活動においてフランス語との混淆が起き、フランス語に徐々に近づいていることが示唆されていた（Merle 2010, pp.183-198）。

## 1.2. カタルーニャ語話者側の「言語」意識：Jaubert de Passa（1824）

一方、「カタルーニャ語」の話者側の認識としては、自らの言語行動は、「言語」「方言」「パトワ」のどれだとみなしていたのだろうか。Coquebert de Montbret（1831）に再録されているJaubert de Passaの*Recherches historiques sur la langue catalane*（1824）は、当時のフランスのカタルーニャ語話者知識人の言語認識の一例を示している。

Jaubert de Passaは、近代カタルーニャ語文学史研究の嚆矢となったこの著作の全編にわたって、一度も「パトワ」という単語を使用していない。カタルーニャ語について言及する際には、一貫して「言語（langue）」を使用し、さらには、「カタルーニャ語」と南仏語との関連においては、「フランスではプロヴァンス語（langue provençale）の名で知られたカタルーニャ語」（de Passa 1824=1831, p. 335）として、13世紀時点においては、南仏で書かれた文学語としてのプロヴァンス語とカタルーニャ語を同一視している。そして、南仏の文学語が衰退した14世紀以降は、カタルーニャ語はアラゴン連合王国の王権のもとで書記言語としての隆盛を経験した（*ibid.*, p. 336, p. 347）ことで、カタルーニャ語の独自性を確立したとみなしている。

しかし、1659年のピレネー条約によってルシヨン地方がフランス王国に割譲され、南カタルーニャにおいてもスペイン継承戦争後、カタルーニャ語は行政言語としての地位を失ってしまった（*ibid.*, p. 387）。その結果、フランスでは「かつて占めていた地位を失い、数多くの南仏のことば（idiômes du midi）の中に徐々に位置づけられるに至る（*ibid.*, p. 373）」った。さらにスペインでは「1714年以来、カタルーニャ語は、スペインの領土を現在もなお明瞭に分割している数多くのことば（nombreux idiômes）の中に格下げされてしまった（*ibid.*, p. 387）」と de Passaは嘆く。idiômeが使用されるのは、他には「ヴァレンシアのことば（idiôme valencien）（*ibid.*, p. 380）」、「ルシヨン地方のことば（idiôme roussillonnais）（*ibid.*, p. 403）」に対してなどであり、当時の他のフランス語圏の識者であるなら「方言（dialecte）」「パトワ（patois）」概念を適用するであろう話しことばの変種である。<sup>6</sup> 「パトワ（patois）」という単語こそ使用しないものの、ここにあるのは、「言語」と、「ことば（idiômes）」との威信の差、すなわち「言語」としてのカタルーニャ語と「南仏のことば」の上下意識であった。同時に、カタルーニャ語が「言語」でなくなった場合には、「南仏のことば」と混同されてしまう、という、言語的類縁性ゆえの警戒が感じられる。

そして、カタルーニャ語を「言語」たらしめるのは、一体性を持つ書記規範であった。他の南仏の諸地域とは異なり、ルシヨン地方では、18世紀においても、カタルーニャ語が一定の書記言語として

の特権を保持していた (Brun 1923, p. 78)。Coquebert de Montbretの方言調査に回答したのはこのde Passaであったが、回答タイトルに「言語 (langue)」を使った唯一の例であると同時に、使用した表記が注目に値する。

Traduction de la Parabole de l'Enfant-Prodigue, en langue Catalane du département des Pyrénées-Orientales

11. Un home tingue dos fills.
  12. Y digue lo mes jove de ells al pare : Pare, daü me la part de be que me pertoca, y lis dividi lo be.
  13. Y pocs dies despres, reunint tot lo del seu, lo mes jove fill, ana caminant lluny de sa casa, en pays estrany ; y aqui malesmersa lo be seu, vivint luxuriosament.
  14. Y despres de aver tot malesmersat vengue forte fam en aquella part de pais, y ell mateix commensa à famejar. (...)
- (Coquebert de Montbret 1831, p. 507)

調査においては、各地の「方言」による「放蕩息子の帰還」を、その口語としての表現をできる限り忠実に翻訳することが求められていた (Merle 2010, p. 156)。その結果、多くの回答例では、実際に話されていることばをありのまま表記することの困難が訴えられつつ (*ibid.*, pp. 155-166)、フランス語の表記ルールで転写することが試みられた。それに対して、カタルーニャ語の回答は、フランス語とは (スペイン語とも) 異なる独自の伝統的表記法が使用されている。<sup>7</sup>

ただし、この著作においては、「言語 (langue)」概念の使用範囲は、必ずしも規範化された書記言語にとどまらない。「ロマンス語 (langue romance) (de Passa 1824=1831, p. 301)」「俗語 (langue vulgaire) (*ibid.*, p. 298)」など古代・中世の歴史的な言語事象のみならず、19世紀時点での話しことばの多様な状況にも「言語」概念は適用された。

C'est donc sur nos montagnes que le catalan a trouvé son dernier asile. C'est aussi là qu'on peut se former une idée de caractère particulier de cette langue (...) soit dans la gaité bruyante qui préside aux danses villageoises. (...) la gaité méridionale a un caractère particulier qui échappe au raisonnement. Elle se parle, mais il est impossible de l'écrire. (de Passa 1824=1831, p. 393)

(...) qu'elle était tout-à-la fois dans les lois, dans les mœurs et dans la langue. (...) la présence d'un certain nombre de Français dans cette province, et l'obligation de traiter toutes les affaires publiques dans leur langue devaient, non seulement nuire à la connaissance méthodique de la langue catalane, mais encore en altérer la pureté. (...) de cette disposition à parler alternativement, et quelquefois à mêler les deux langues, il en est résulté une espèce de langue de convention, que les uns appellent catalane, parce que c'est le peuple qui l'a particulièrement adopté, et qui n'est à proprement parler, qu'un mélange de mots catalans, espagnols, languedociens et français. (*ibid.*, pp. 391-392)

単語としては「言語 (langue)」が使用されていづつも、ここでの議論も、当時の知識人の「パトワ」に対する関心や観察を共有している。すなわち山奥ではまだその「純粋さ」が保たれているが、現在言語接触によって混淆が起きている話しことば、という認識である。古くからの交通の要衝地であるこの地域は、フランス語圏の<言語>/パトワの単純な二分法が通用しない、ロマンス諸語の混淆的なポリグロシヤ状況が常態であったが、今や法や公的な行政言語としてのフランス語に対してだけでなく、カスティーリャ語、そして隣接するラングドック語との混淆が見出され、それがカタルーニャ語の純粋さを損ねる警戒すべき現象とみなされるようになった。

### 1.3. Étienne Gabriel Arbanère, *Tableau des Pyrénées françaises ; contenant une description complète* (1828)

このようなルシヨン地方の混淆的な言語事象に対して「パトワ」と名指しすることは、外部からの記述としては珍しくなかった。たとえば Jaubert de Passa と同時代人であり、南仏出身ではあるがルシヨン地方出身ではない Arbanère は、ピレネー山間部の多様な言語状況を *patois*、*idiome* または *dialecte* と称して、その明確な区別をしないまま使用している。

Les habitants des Pyrénées n'ont jamais ainsi formé un tout ; leur pays a été long-temps une des grandes routes des invasions qui laissent pour traces l'épouvante, l'ignorance, la barbarie. Leurs dialectes divers n'ont pu se fondre en un seul langage, par le défaut d'un gouvernement central. (...) Le patois roussillonnais, plein de termes espagnols, me plaît plus dans sa couleur méridionale, que l'idiome bigorrais et béarnais. J'ai vu, dans plusieurs ouvrages, citer avec éloge les romances de Despourins dans le patois du Béarn. (Arbanère 1828, pp. 294-295)

ここでは、「パトワ」はルシヨンの地名を形容詞として付しつつ使用され、その特徴は、スペイン語の語彙の混入であるとされている。18世紀後半以降のフランスの多言語状況の記述方法にならない、地域名を付された混淆的な話しことばに対して、他称としての「パトワ」が付されていた。

## 2. 19世紀後半から20世紀における「Roussillon 地方のことば」についての議論

### 2.1 Achille Luchaire, *Études sur les idiomes pyrénéens de la région française* (1879)

19世紀後半にはフランス国内の多様な言語に対する研究も進んだ。Luchaire の著作は、「ピレネー地方の四つの異なることば (quatre idiomes différents) (Luchaire 1879, p. 1)」、すなわちバスク語・ガスコーニュ語・ラングドック語・カタルーニャ語について、その歴史や地域ごとの音韻、語彙、統語、地名や人名、言語領域などについて、Luchaire の専門であったガスコーニュ語を中心に、当時の言語学研究の最新の研究成果を取り入れて幅広くまとめている。

この著作において、「言語」「方言」「パトワ」の使い分けはかなり意識されているが、それと同時に、言及する「四つのことば」それぞれでその用語の使用方法に差異が見られる。バスク語、あるいはエウスカラ語 (l'euskara) は一貫して「言語 (langue)」と称され、その内部の地域差に言及する際は「方言 (dialecte)」（さらに *sous-dialecte*）を使用する (*ibid.*, p. 126)。次にガスコーニュ語 (la langue gasconne) については、「我々の最良のロマンス語研究者の一人であるシャバノー氏に習い、我々はガスコーニュ語を言語 (langue) と呼ぶ。それはオック語 (langue d'oc) とガスコン語を結びつける明らかな繋がりを無視しているのではなく、その数多くの独特の特徴ゆえに、それが南仏の諸方言の中でも際立った位置を占めているからだ (*ibid.*, p. 193)」とした。そして、「言語」の下位変種として一定のまとまりをもった「方言」を分類し、集落単位での実際に話されている個別の特徴を具体的に例示したり言及したりする際に、「パトワ」を多用している。ここでは、「パトワ」はロマンス諸語の範疇における、極めて多様で境界も曖昧な発話実践を指している。

ガスコーニュ語は「言語 (langue)」と称したのに対して、最終章でピレネーの東端に位置するラングドック語とカタルーニャ語に言及するに当たって、Luchaire は章のタイトルを「フォワ伯爵領のラングドシアンパトワと、ルシヨンとセルダーニュのカタルーニャパトワ (les patois languedociens du comté de Foix et les patois catalans du Roussillon et de la Cerdagne)」とし、二つをまとめて論じている。どちらもその話されている領域がピレネー周辺を超えて広がっている中で、特にピレネー地域の話しことばの諸特徴に焦点を当てているため<sup>8</sup>でもあるが、「二つの方言 (dialectes) はいくつかの点ではガスコーニュ語よりも互いに、そして古プロヴァンス語に似ている (*ibid.*, p. 28)」として、互いの類似性がたびたび強調された。また、以下のような使用も見られる。

Les patois actuels du haut bassin du Tech ne diffèrent de celui du Roussillon que par un plus grand nombre de traits communs avec l'espagnol : (...) des emprunts plus nombreux au lexique espagnol, etc. (*ibid.*, p. 355)

現実の話しことばの混淆状況（ここではスペイン語）に言及する際には、「パトワ」概念が学術的な記述においても有用であった。

## 2.2 *Revue Catalane* (1907-1920)における議論

Patoisの呼称がルシヨン地方の話しことばに対して使われ続ける中で、1907年、*Société d'Études Catalanes*の機関紙である雑誌*Revue Catalane*は、カタルーニャ語の衰退を憂い、ルシヨン地方のカタルーニャ語文学のルネッサンスを目指す目的でベルピニャンで刊行された。その第2号に掲載された記事では、たとえ話しことばに混淆的要素があったとしても、カタルーニャ語が「パトワ」などではなく「言語」である、と主張するに足る根拠が述べられている。

Le Catalan est-il une langue ? Le Catalan est-il un patois ? Tel était le sujet de cette discussion qui s'envenima au point qu'un pari fut engagé. (...) Le Catalan est une langue, une vraie langue et non un patois. (...) Quelques mots nouveaux, castillans dans la Catalogne espagnole, en français en Roussillon s'y sont ajoutés. (...) Du reste, les Catalans, tant d'Espagne que de France, n'ont jamais cessé non-seulement de parler, mais d'écrire en Catalan. (...) elle (la langue catalane) a tous les caractères d'une langue : Documents officiels, littératures abondante et varié, etc... écrits conformément à des règles connues, régies par des grammaires et avec une orthographe fixée par des dictionnaires. Il n'aurait pas toutes ces caractères s'il n'était qu'un patois. (...) En dehors du Provençal et du Catalan, les autres sont des patois (je ne parle pas, bien entendu, du Basque, qui n'est pas une langue romane.) Et je conclus : Ce sont des patois parce qu'ils n'ont jamais eu ni de valeur officielle, ni de règles établies par des grammaires, ni d'orthographe fixée par des dictionnaires. (Verges de Ricardy 1907, pp. 54-56)

しかし、固定された文法や正書法は、必ずしも当時のルシヨン地方の人々に普及しているわけではなかった。文学語としてのカタルーニャ語の復権のためには、二つの危険があると創刊号の冒頭で警告されている。

Il est, en effet, deux dangers opposés que ne surent malheureusement pas éviter toujours vos prédécesseurs : l'archaïsme et le patois. (...) Les autres, soucieux de popularité, ne reconnaissant et n'employant que l'actuel idiome avec tous les termes qui le déshonorent, ne furent pas loin de se mettre d'eux-mêmes hors du véritable catalan (...). (Amade 1907, p. 13)

ここでは「パトワ」とは、ルシヨン地方の言語変種に対する名づけというより、人々の言語実践そのものを指している。その実践とはどのようなものだったのか、実際の人々の会話を収集した Pastre は、その特徴についてフランス語とラングドック語の語彙の混入をあげている。

Lorsqu'on compare ce texte à ceux que nous avons cités plus haut, on est étonné de la quantité de mots français et languedociens qui se sont introduits dans la langue. C'est cependant là le catalan actuel de Perpignan, (...).  
(Pastre 1908, p. 80)

ラングドック語との混淆は、しかし、ラングドック語それ自体がフランス語と混淆し、「パトワ」とみなされ、ラングドック語話者自身も「パトワ」と自称するようになっていただけに、一層「危険」であった。第一次世界大戦後、地方分権化の議論がなされる中で、ルシヨン地方が Septimanie の名の下に南仏の一部とされる提案に対して、強く反発する意見が掲載されている。<sup>9</sup>たとえ言語的類縁性が強くても、コルビエールより北の *gavatch*<sup>10</sup>の人々との区別意識は、従来からとても強かったのである。

Notre langue catalane, parlée dans toutes les provinces de la Catalogne espagnole, est incomprise au-delà des Corbières, où commence ce que nos pères appelaient par ironie le *gavatch*. Cela est si vrai que, dans les cantons de Latour-de-France, de Saint-Paul-de-Fenouillet, de Sournia, de Formiguères, pays de l'ancienne France, la langue catalane n'y fut et n'y est jamais parlée, ou si mal, qu'elle n'est plus qu'un *patois* francisé.  
(Sarrète 1919, p. 208)

### 3. カタルーニャ語辞書における「パトワ」の記載

19世紀にスペイン側のカタルーニャ語圏各地で刊行されたカタルーニャ語の辞書の中のいくつかは、見出し語に「パトワ」を採用している。これは、ルシヨン地方において、他称としての「パトワ」が頻繁に使用されており、カタルーニャ語の語彙の一つとみなされる程度までに定着していたことを示していると思われる。ただし、その説明も綴りも辞典ごとに異なり、安定していない。

• Figuera, Pere Antoni. *Diccionari mallorqui-castella*. (1840)

**Patuà.** *m.* Llengatge incúlt de algún llòc particular. *Patué.*

• Escrig, José, *Diccionario valenciano-castellano* (1851)

**Patué.** Patuá ó lengua corrompida que habla el vulgo, y es peculiar de ciertas provincias ó comarcas, patuá ó patués.

• Martí i Gadea, *Novísimo diccionario general valenciano-castellano*. (1891)

**Patuè.** *m.* lit. Patuá, patuá ó patués: dialecto que se habla en las comarcas francesas limítrofes á los Pirineos; es una rama del lemosín.

1840年のFiguera編纂の辞書では、その説明は「とある場所の教養のないことば」と、普通名詞的であるが、EscrigとMartí i Gadea編纂の辞書では、「特定の地方や領域」、さらには具体的に「ピレネーの国境線沿いのフランスの領域」で話されている「方言」だとみなされている。<sup>11</sup>ここでは、「パトワ」は、フランス側で話されているカタルーニャ語の変種についての固有名詞のような機能を果たしている。スペイン側のカタルーニャ語圏の人々にとって、「パトワ」とは、国境を越えたフランス側で話される、スペイン側にはない独自の（しかし隣接するラングドック地方のオック語と共通する）語彙（Rafanell 2017, p. 270）や、フランス語との混淆の目立つ言語事象を指す他称であった。

20世紀に入って刊行された、現代カタルーニャ語規範において決定版とも言えるFabraの辞書では、*patuès*が見出し語として採用された。そこでは、「パトワ」とは、「書記言語文化を奪われた話しことば」と、普通名詞として説明されている。この綴りによる見出し語とその定義は、その後刊行された多くのカタルーニャ語辞書にも引き継がれて採用されている。

- FABRA, Pompeu, *Diccionari General de la llengua catalana* (1932)  
**Patuès** *m.* Parlar dialectal esp. el privat de cultura literària i emprat sols en la conversació familiar.

スペイン側のカタルーニャ語話者から、「書記言語文化を奪われた話しことば」を意味する「パトワ」が、多くの場合にはフランス側のカタルーニャ語を指示しているとみなされてきたことに対して、当の話者たちはどのように考えていたのであろうか。その一端を、近年刊行された「北カタルーニャ語」とフランス語との二言語辞書（規範カタルーニャ語もカッコ書きで付記）から見るができる（Camps i Botet, 2013）。そこでは、北カタルーニャ語の語彙における*occitanismes* /*gallicismes* /*castellanismes*をあらかじめ紹介しつつ（*ibid.*, pp. 15-16）、その混淆について「それが生きた言語の定義なのではないか？」と裏表紙の紹介文で言及している。しかし、この辞書において、*patuès*は見出し語として採用されていない。北カタルーニャ語の「完璧な遷移言語（*una perfecta llengua de transició*）（Jaquet i Surjus 1999, p. 111）」としての話しことばの混淆状況を積極的に提示しつつも、「パトワ」という単語自体をその語彙レパートリーとして認知することを拒否したのである。

#### 4. まとめ

19世紀、フランス国内のフランス語普及政策が進み、「パトワ」概念がフランス国内のロマンス語圏において浸透する過程で、書記言語としての伝統を継承していたルシヨン地方のカタルーニャ語にも、他称としての「パトワ」概念が使用されるようになっていた。「パトワ」概念を適用する根拠は、話しことばの混淆＝崩れの状況と、自称としての「パトワ」が定着しつつあった南仏のオック語との歴史的言語的類縁性、同一視であった。

ルシヨン地方のカタルーニャ語とオック語の連続性は疑うべくもなく（Veny 2006, pp. 147-204）、19世紀の南仏のFelibrige文学運動とカタルーニャ語のRenaixença運動との強い連携など、両言語を一体視する風潮もあった（Rafanell 2006, pp. 56-92）。しかし、公的言語としての機能を失いつつも、19世紀まで書記言語の伝統をなんとか保持してきたルシヨン地方のカタルーニャ語話者知識人たちが恐れたのは、自らのことばの中に、固有性ではなく混淆を見出されることであった。中世の歴史的文学語や山間部の純粋な言語活動に対する学術的関心が高まった一方で、ルシヨン地方のカタルーニャ語話者たちは、フランス語／オック語／スペイン語との三重の混淆を恐れなくてはならなかった。そして、「パトワ」を呼称として受容することは、オック語の一部、すなわちフランス語に従属する「方言」とみなされることでもあった。コルビエール山脈の北の住民に対する区別意識も強かったルシヨ

ン地方の話者たちは、話しことばにおける連続性や混淆は認めても、「パトワ」という概念それ自体を拒否することで、カタルーニャ語の「言語」としての威信とオック語との境界を保持し、フランス語圏における〈言語 (LA langue)〉／パトワの二分法を拒否しようとしたと思われる。

ただし、文法・辞書・正書法があるがゆえに「公的な価値」を持つ〈言語〉 (LA langue) であるとみなし、「パトワ」の存在を嫌悪し、拒否する考え方は、フランス語の思想そのものでもある。

---

<sup>1</sup> Charles Coqueber de Montbretの調査結果は、その後息子Eugèneによって一部まとめられて刊行されたが、そこで収集された「放蕩息子の帰還」のうち、「オイル語 (langue d'Oyl)」「オック語あるいはロマンス語 (langue d'Ocまたはlangue romane)」に属する「方言 (dialectes)」(Coquebert de Montbret, E., 1824=1831, p.433) 86編が収録されている。返答のうち86編中73編が冒頭の説明でpatoisを使用、dialecteを使用したのは8編のみであった。

<sup>2</sup> 2019年9月にピレネー・オリエンタル県立公文書館で、受付の文書館員に「なぜカタルーニャ語をパトワと言わないんでしょう？」と軽く聞いたところ「あなたがパトワと言うとしたらそれは私の気分を害するため、だから私は気分を害しています (Si vous me dites patois, c'est pour me vexer, alors je me vexe)」と返答された。

<sup>3</sup> Berjoanは「〈パトワ〉、すなわち無秩序で下品な、選ばれるべき固有語であると要求することなど不可能な話しことば (Berjoan 2009, p. 122)」と、「パトワ」を極めて軽蔑的な含意を持つ概念としてカッコで括りつつ説明し、その後は「彼ら (地元の文人) はカタルーニャ語が無秩序で無価値な話しことばなどではないことをまず思い起こさせ (ibid., p. 134) (下線部強調筆者)」などとして、「パトワ」という単語を論文内で使用すること自体を忌避している。

<sup>4</sup> 以下、引用文での下線強調は全て筆者による。

<sup>5</sup> 「カタルーニャ語」の言語名称の変遷については、Rafanell 1991, Rafanell 2006 参照。

<sup>6</sup> 公的な書記言語としての伝統を失うことで、「言語 (langue)」が「ことば (idiôme)」に格下げされる、という概念の対立は、当時のフランス語圏の用語法の中では独特と言えるだろう。これはカタルーニャ語の *idioma* の概念に近い用法であることも考えられる。

<sup>7</sup> ここで使用されている表記法は、現在の標準カタルーニャ語の正書法とは異なる点もある。また、訳されているカタルーニャ語は、男性単数定冠詞の *lo* の使用などが特徴的な、ルシヨン地方の変種である。他にルシヨン地方変種の特徴としては、否定辞の *pas* の使用、一人称単数活用語尾の *-i* などが挙げられる (Bernardo 1988, p. 135) が、これらの特徴はオック語との共通点でもある。

<sup>8</sup> ロマンス語研究の対象としてその概要が説明される際には、カタルーニャ語に対しては *langue* または *idiome* が使用されているが、そこでも「Diezはその著作 *Grammaire des langues romanes* の中で、オック語 (*langue d'oc*) の諸言語 (*les idiomes*) の中で極めて特異な場を占めているカタルーニャ語の特徴を列挙している (Luchoire 1879, p. 348)」として、オック語の一つとみなしている。

<sup>9</sup> 地方分権化とその区切り方については、2004年に *Languedoc-Roussillon* 地域圏を *Septimanie* に改名しようとした提案の際、また2016年に地域圏合併によって、新しい地域圏の名称が *Occitanie* に決定した際に、ルシヨン地方の人々が激しく反発し、数万人規模のデモが開催された。この点については稿を改めて論じたい。

<sup>10</sup> *Gavatch* (*gavatx, gavach*) は、コルビエール山脈以北に住む人々 (隣接の南仏人〜フランス人全般) への敵対心も含めた蔑称として、ルシヨン地方でよく用いられていた (Merle 2010, p. 151)

<sup>11</sup> 19世紀末に編纂された「バレンシア語」の辞書において「*lemosin* の一種」と説明するのは、「カタルーニャ語」においても、その範囲や名称の議論が錯綜していたことを示している (Rafanell 1991, p. 24, Rafanell 2006, pp. 132-133)。

## 参考辞書

ALCOVER, Antoni M. i Francesc de B. MOLL, 1926-1968, *Diccionari Català-Valencià-Balear*, Ciutat de Mallorca.

CAMPS, Christian, Renat BOTET, 2013, *Diccionari nord català, francès/ català normatiu*, Editions Trabucaire, Perpignan.

ESCRIG, José, 1851, *Diccionario valenciano-castellano*, Imprenta de J. Ferrer de Orga, València.

FABRA, Pompeu, 1932, *Diccionari General de la llengua catalana*, Llibreria Catalònia, Barcelona.

FIGUERA, Pere Antoni, 1840, *Diccionari mallorquí-castella*, Imprenta y Llibreria de Esteva Trias, Palma.

INSTITUT d'ESTUDIS CATALANS, *Base de dades lexicogràfica BDLex* <https://bdlex.iec.cat/scripts/index.asp>

MARTÍ I GADEA, Joaquim, 1891, *Novísimo diccionario general valenciano-castellano*, València.

---

## 参考文献

- AMADE, Jean, 1907, “Appel aux Poètes Catalans Roussillonnais”, *Revue Catalane*, No.1, 9-14.
- ARBANÈRE, Étienne Gabriel, 1828, *Tableau des Pyrénées françaises ; contenant une description complète*, Tome second, Paris.
- BERJOAN, Nicolas, 2009, “L’honneur d’une langue. Les Roussillonnais et le catalan durant le premier XIXe siècle (1815-1870)”, *Romantisme*, 2009/3 no.145, Armand Colin, 121-135.
- BERNARDO, Domènec, 1988, “Le catalan, la problématique nord-catalane”, VERMES, Geneviève (dir.) *Vingt-cinq communautés linguistiques de la France*, Tome 1, L’Harmattan, Paris, 133-149.
- BRUN, Auguste, 1923, *L’introduction de la langue française en Béarn et en Roussillon*, H.Champion, Paris.
- COQUEBERT de MONTBRET, Eugène, 1831, *Mélanges sur les langues, dialectes et patois : renfermant, entre autres, une collection de versions de la parabole de l’enfant prodigue en cent idiomes ou patois différents presque tous de France ; précédés d’un essai d’un travail sur la géographie de la langue française*, Paris.
- JAQUET i SURJUS, Gérard, 1999, “Situació de la llengua a la Catalunya del Nord”, STRUDELL, Miquel *et al.*, *El Català, un debat a finals del segle XX*, La Busca edicions s.l., Barcelona, 109-118.
- LUCHAIRE, Achille, 1879, *Études sur les idiomes pyrénéens de la région française*, Maisonneuve et C<sup>ie</sup>, Paris.
- MERLE, René, 2010, *Vision de «l’idiome natal» à travers l’enquête impériale sur les patois (1807-1812)*, Trabucaire, Perpignan.
- De PASSA, F. Jaubert, 1824, *Recherches historiques sur la langue catalane, Mémoires et dissertations sur les antiquités nationales et étrangères publiées par la Société Royale des Antiquaire de France*, Tome sixième, Paris (réédité en 1831 in Coquebert de Montbret, 297-403).
- PASTRE, Louis, 1908, “La langue catalane populaire en Roussillon (suite)”, *Revue Catalane*, No.15, 78-87.
- RAFANELL, August (ed.), 1991, *Un nom per la llengua*, Eumo Editorial, Vic.
- RAFANELL, August, 2006, *La il·lusió occitana : la llengua dels catalans, entre Espanya i França*, Quaderns Crema, Barcelona.
- RAFANELL, August, 2017, “Le Nord ou l’Autre. Le Roussillonnais imaginé dans la littérature catalane d’outre-Pyrénées (1880-1936)”, *Revue des langues romanes*, Tome CXXI No.1, Presse universitaires de la Méditerranée, 265-295.
- 佐野直子, 2020, 「フランス語圏における『パトワ』概念の歴史的変遷と『言語』『ロマンス語研究』53号, 103-112.
- 佐野直子, 2021, 「近代フランス語圏における『パトワ』と『方言』概念の変遷」『ロマンス語研究』54号, 27-36.
- SARRÈTE, Jean, 1919, “A propos du récent Congrès Régionaliste de Marseille”, *Revue catalane*, No.156, 204-209.
- VENY, Joan, 2006, *Contacte i contrast de llengües i dialectes*, PUV, València.
- VERGES de RICAYDY, Emmanuel, 1907, “Le catalan est-il une langue? Le catalan est-il un patois?”, *Revue catalane*, No.2, 54-56.

\* 本論文は、基盤研究 B 「フランス語圏における『パトワ(patois)』概念についての歴史・地理横断的研究」(2018-2021, 代表・佐野直子) の研究成果の一部である。